

ジャガイモ文化の伝導者であった梅村芳樹

西尾 敏彦

強盗がむすんだ奇縁

わたしにとって、梅村芳樹という人のもっとも鮮烈な記憶は、農林水産省技術会議事務局にいたときのものである。南米で梅村ひきいる遺伝資源探索チームが強盗にあったという緊急報が局に飛び込んできた。全員無事で、命に別状なかったというものの、銃を突きつけられ、身ぐるみ剥がれたという。

だが数日後、帰国して事件の報告にあらわれた彼は落ちついたもんだった。周囲の大騒ぎをよそに、事件の経過をたんたんと語った彼の顔を今でもよく憶えている。あとで聞いたが、彼は強盗に銃を突きつけられたときも泰然としていたらしい。

梅村はどこにいても話題が絶えない人だった。卓越した発想と行動力がそうさせたのだろう。以下、彼のイモ人生を追ってみよう。

ジャガイモとの出会い

梅村は愛知県の生まれ。大学を卒業、農林省に入り、2年ほど札幌の作況調査課につとめた後、昭和36年(1961)、北海道農業試験場に移った。北海道農試は札幌市羊ヶ丘にある。だが彼が配置されたのは、本場から車で40~50分離れた、当時島松(現在の恵庭市下島松)にあったジャガイモ品種改良の研究室だった。

島松は風が強い。この強風がジャガイモの大病害ウイルス病を媒介するアブラムシの発生を抑える。島松にジャガイモの隔地研究室ができた理由はここにあった。

梅村は島松に2度勤務した。最初は研究員として17年、2度目は研究室長として10年。彼が研究員として活躍した最初の17年間に、島松試験地で彼が育成に関与した品種には「ホッカイアカ」(昭和40年育成)、「ビホロ」「タルマエ」(ともに昭和44年)、「トヨシロ」(昭和51年)、さらに「ハツフブキ」(昭和54年)、「ホッカイコガネ」(昭和56年)、「キタアカリ」(昭和62年)などがある。なかでも彼が手塩にかけて育てた「トヨシロ」については、こんな話が伝わっている。

「トヨシロ」が世に出た当時のこと。ポテト産業最大手のC社の社長室に、リュックを担いだ男が乗り込んできた。「トヨシロ」の売り込みにきた梅村である。

やおらリュックからいもを取り出し、この品種がいかに油加工適性にすぐれ、いかに多収であるかを力説した。「トヨシロ」は肉色が白く、目が浅く、剥皮歩留まりが高く、油加工による褐変も少ない。チップス用に最適というのである。

この売り込みが功を奏したのだろう。現在、国産ポテトチップスが輸入ポテトに席巻されないでいるのは「トヨシロ」があったおかげといわれる。平成12年(2000)現



写真1 農場における梅村芳樹（梅村拓氏提供）

在、「トヨシロ」の国内栽培面積は9103ha。今ではチップスなどのスナック原料のほか、サラダやコロッケなどにも利用されている。

アンデス文明との出会い

昭和52年（1977）、梅村は17年間のジャガイモ研究に別れを告げ、南米コロンビアにある国際熱帯農業研究センターCIATに着任する。ここでの彼の仕事はキャッサバの耐病性育種研究であった。だがこのコロンビアでの生活が、彼のイモ人生にとって大きな転機になった。

なにしろ彼が滞在したアンデス山地はジャガイモ発祥の地である。ここにはさまざまなジャガイモ文化が開花していた。「アンデスの村々にはいろいろなジャガイモが栽培されています。高地では葉が小さくて美しい花をつける小粒のいも、低地では日本のジャガイモに似た大粒のいもですが、種類が多くとくに小粒はいもの形、皮色、肉色、風味がさまざまです」¹⁾ 彼にとって、すべてが新鮮で、刺激的な2

年間だったに違いない。

2年後、梅村はさらに農林水産省熱帯農業研究センター在外研究員としてタイに移り、ここでもキャッサバの育種手法の研究に従事した。

サツマイモとのつき合い

昭和58年（1983）、梅村は帰国。鹿児島県指宿市にあった九州農業試験場甘しょ交配研究室長に就任する。

じつはこの研究室の本務は温泉熱を利用して人工交配を行い、できた種子を別の品種改良研究室に供給することにあつた。だがコロンビアでイモ文化に接した彼には、それだけでは飽き足らなかった。

おりしも南九州のデンプン用サツマイモは国際化の荒波を受けて壊滅の危機にあり、新たな用途開発が急がれていた。ここで梅村が着目したのが紫など有色サツマイモであった。

サツマイモにも黄・白・紫・橙・茶など有色種がある。彼は持ち前の行動力で周辺の村々を歩き、有色サツマイモ品種を活用した特産品づくりを説いてまわった。鹿児島県穎娃町（現在は南九州市）や沖縄県読谷村などで、有色サツマイモを活用したチップス・羊かんなどの特産品づくりが生まれた背景には、彼の助力があつた。

梅村の活躍は企業にも注目された。なかでも食用色素のトップメーカー(株)三栄源FFIは紫サツマイモに含まれるアントシアニンを色素原料として利用することに興味を示した。平成11年（1999）に九州農試と三栄源FFIが共同登録した「アヤムラサキ」は、高アントシアニン・サツマイモ品種第1号だが、その高アントシアニン特性は梅

村が山川町（現在は指宿市）の農家から譲り受けた在来品種「山川紫」に由来するものだった。九州農試の高アントシアニン・サツマイモ品種の育成はその後も継続されているが、そのきっかけをつくったのは梅村とあってよいだろう。

カラフルなジャガイモづくり

平成元年（1989）、梅村は12年ぶりに最初の任地島松にもどり、ばれいしょ育種研究室長に就任する。ここから彼のひと味違う品種改良がはじまった。

「育種は少なくとも10年先の需要を予測していなければならない。はずれるリスクを覚悟し、複数のターゲットを決め、素材を集め、選抜をすすめているのである。

ニーズの先取りのために若い人びと、とくに女性の研究室への来訪を歓迎し、料理講習会を開き、食品売場やレストランに通うのも仕事である²⁾

食文化にもつながる品種改良、彼がころざしたのは、南米でみた多様なジャガイモ文化の定着だったに違いない。

彼の発想のもとに育成された品種に「とうや」（平成4年）、「ベニアカリ」（平成6年）、「さやか」（平成7年）、「アーリースターチ」（平成8年）、「インカのめざめ」、「インカレッド」（ともに平成14年育成）などがある。なかでも「インカ」のつく3品種は、カロチノイドやアントシアニン系色素を多く含み、カラフルで良食味、機能性食品として、菓子材料として、普及が期待されている。

農家がみた梅村芳樹

梅村は農家とのつき合いを大切にした。

農家のみた梅村を知りたくて、彼と親交のあった農家、折笠秀勝さんを十勝の農場に訪ねてみた。

折笠は梅村に惚れ、それまでの「メイクイン」の栽培をやめ、「ホッカイコガネ」に換えたという。「ホッカイコガネ」は「メイクイン」に比べ、煮くずれが少なく、煮物やサラダに向く。梅村はこの品種に彼が創作したレシピを添えて出荷するようすすめたという。結果は大成功で、それまでの10倍も売り上げが伸びた。農家だけでなく消費者にまで目配りをする梅村流の品種改良の、これが極意なのだろう。

ちなみに彼はジャガイモ料理人としても一流で、ときには小学校にも出向き、子どもとお母さんのための料理教室も開いている。著書にも『皮までおいしいジャガイモ料理』（1998、創森社）、『ジャガイモ料理はくはく』（監修、2002、創森社）がある。

別れ際に、折笠は「梅村さんはジャガイモの新時代を拓いた人です。幅の広い人で、わたしたちのジャガイモに対する見方を根本から変えてくれました」と語り、昔を懐かしんでいた。

アイデアと行動の人

ジャガイモ、サツマイモ、キャッサバを世界の三大いも類という。梅村はその三大いも類のすべてを対象にした稀有な研究者だった。彼はまたイモ類の研究者であったせいもあって、島松・コロンビア・タイ・指宿と、終始孤立した少人数の組織で研究生活を送っている。こうした経験が彼の天性をさらに磨きあげたのだろう。豊富なアイデアと卓越した行動力は、ここから生まれたに違いない。

梅村の行動は、ときに組織の枠を越えるという、そしりがなかったわけではない。だが、彼が越えた枠の外には、いつも農業の現場があった。周囲の農家にとけ込み、消費者まで巻き込んで技術を考える。その梅村のアイデアと行動力が、辺地で苦悩する農業を力づけたことは数々の実績が示すとおりである。

退職後の活躍、ロマンを追い求めて

平成9年(1997)、梅村は農林水産省を退職。退職後は札幌郊外北広島に住み、年来の夢、ジャガイモ文化の伝導活動に邁進する。いっぽうで、近くの千歳市で農場を経営するご子息の拓さんの農場に通い、みずからが育成したジャガイモや野菜の有機栽培をたのしんでいた。

そんなタフな梅村だったが、平成18年(2006)12月、こつ然と世を去った。享年70、まだやりたいことがいっぱい残ってい

ただらうに。早過ぎる死であった。

だが、彼の夢はここで途切れたわけではない。先日、拓さんからメールをいただいた。

「私たちが農園をはじめたのは100%父の影響によるものです。父の作る野菜の美味しさをもっとたくさんの人たちに知ってもらいたいと思い、年老いた父の代わりに私たちがはじめたものです。父の知識や技術を習得する前に他界してしまいましたが、今でも父のいっていた言葉を思い出しながら土にむかっています」

梅村のロマンは確実に受け継がれている。

最後に報告しておこう。梅村がその研究生活の大半を過ごした島松試験地はホクレンに移管されたが、今もジャガイモの品種改良がつづけられている。

引用・参考文献

1. 梅村芳樹 ジャガイモ『世界を制覇した植物たち』学会出版センター 1997.
2. - ばれいしょの新用途開発育種 農業技術45(7):304~309、1990.
3. - 高アントシアンサツマイモの用途開発と原料用品種の育種 いも類振興情報24:2~8、1990.
4. 岡 啓 梅村芳樹さんを偲んで 農林水産技術同友会報44:38~39、2007.
5. 中谷 誠 紫サツマイモの新規需要開拓 未発表.



写真2 現在の島松試験地